



第10号 令和7年3月25日発行

 **社会福祉法人 和歌山つくし会**

本部 和歌山県和歌山市吉礼字八ツ井486番地の1  
TEL : 073-488-7470  
FAX : 073-478-1900

事務局 和歌山県岩出市中迫665  
TEL : 0736-69-1772  
FAX : 0736-69-5251

## 特集 『和歌山つくし会創業70周年記念式典』





## 目次

## 1. 和歌山つくし会創業70周年記念式典

## 第一部 記念式典

開会挨拶 谷本 美佐子 和歌山つくし会 理事長

和歌山つくし会沿革 創業70年の歩み

表彰式 感謝状贈呈

谷本千鶴賞・つくしっ子特別賞贈呈

和太鼓演奏 腹話術

第二部 席上揮毫・記念講演 金澤 翔子 金澤 康子

2. 令和6年度 受賞者喜びの声 谷本千鶴賞・つくしっ子特別賞  
 全国社会福祉協議会会長表彰  
 和歌山県社会福祉協議会会長表彰

## 3. つくしっ子インタビュー

瑞宝単光章を受章して 前田典子 広瀬幼保園 副園長

## 4. 伊都地方在宅障害児支援ネット『かっちゃんの会』

飯塚 忠史 地域在宅支援センター センター長

## 5. 令和6年度 和歌山つくし会 永年勤続表彰

## 6. つくしっ子連載

連載第2回 里親支援センター「なでしこ」

第2種社会福祉事業 里親支援センターへの道のり

森下 宣明 社会福祉法人 和歌山つくし会 常務理事

連載第7回 「イタリアで見つけた共生社会のヒント」

川野 琢也 つくし医療・福祉センター リハビリテーション課 課長

## 7. つくしっ子レポート！ 研修特集

「みんなでおとまり、たのしかったよ！」和歌山乳児院

「須磨シーワールド」つくしの里こども園

「ディズニー・オン・アイスへ！」広瀬幼保園

「大仙公園とチョコレートミュージアム、須磨シーワールド」

8. 「移動ミニ博物館が来たよ！」 濱田 拓也 多機能型福祉事業所「つくしの里」 所長

9. つくしっ子 もふもふニュース！ 10. 編集後記

## 和歌山つくし会創業70周年記念式典 2024年10月26日

令和6年10月26日、和歌山市内のホテルに於いて和歌山つくし会創業70周年記念式典が執り行われました。式典には法人関係者約150人が出席し、盛大に節目を祝いました。

### 第一部 記念式典

理事長挨拶

昭和29年12月、故・谷本千鶴医師は和歌山市内の城北地区において幼児のための私設保育所を開所し、創業を始めました。令和6年に和歌山つくし会は社会福祉法人開設から55年、創業時から70周年となります。

70年といえますと、日本の戦後史を約10年遅れで辿っていくこととなりますが、つくし会の創業当時は、まだ戦後の復興も道半ばだった時代でした。

昭和22年に児童福祉法が制定されましたが、現実社会はこどもたちにとってまだまだ厳しく過酷なものであり、劣悪な環境のもと、栄養失調で亡くなるこどもも多かったことから、「こどもたちを守らなければならない」という使命感にかられた谷本千鶴医師は4人の協力者ととも児童福祉法に準拠し、保育所活動を始めたのです。

創業のメンバーは医師、看護師、保育士などであり、こどもたちの健康、栄養、環境に配慮した公益的な事業でした。

児童福祉法の第1章には「全ての児童はその生活を保障され、愛され、心身の健やかな成長及び発達が保証されなければならない（略）」と明記されています。

その活動がのちに和歌山乳児院、乳幼児肢体不自由児施設岩出整肢園（のちの重症心身障害児施設岩出療育園）、桃山療護園、つくし保育所、広瀬保育所の開園、設立に繋がっていきました。

昭和41年に財団法人「和歌山つくし会」が発足し、44年に社会福祉法人として開設が許可されました。昭和46年に当時の皇太子殿下が美智子妃殿下とともに岩出整肢園に行啓されたことは、当時の職員たちにとって今でも忘れられない思い出であり、その時の様子はNHKでテレビ放映され、まだ世間で障害のある方々に理解が少なかった時代、世論に一石を投じるようになった出来事でした。

初代理事長谷本千鶴先生は昭和57年に64歳でその生涯を閉じましたが、人生の後半30年を設立した5つの施設に捧げ、「こどもたちや障がいのある方々につくす」という精神を貫き通した人生でありました。

設立された5つの施設は歴代理事長のもと、職員が一丸となり発展を続け、より専門的な医療、介護、リハビリテーション、保育などが行われるようになりました。

岩出療育園と桃山療護園は合併し、「つくし医療・福祉センター」となり、気管切開や経口栄養摂取の必要な重症の入所者が増え、高齢化も進んでいます。近年著しく増加している発達障害児の支援をはじめ、リハビリテーションにも力を入れています。

地域在宅支援センターでは、地域の皆様のための訪問看護、介護の拡充を目指し、つくし保育所と広瀬保育所は日本でもいち早く幼保連携型の認定こども園となり、あらゆる角度から就業する保護者の子育て支援を行っています。

和歌山乳児院は設立後67年経過した今でも、家族とともに暮らす事の出来ないこどもたちを守っています。平成6年に里親支援センター「なでしこ」が第2種社会福祉事業として和歌山乳児院から独立し、事務所を備えたホールと広場を新設した和歌山つくし会にとって第6番目の施設となりました。

令和6年は能登地方の地震で始まり、各地で大雨による災害が発生し、少子化や人口減少は一層顕著になる傾向で、人材不足や物価の上昇などを伴い、社会福祉法人にとって今後苦しい時代は続くものと思われます。

しかしながら、私たち和歌山つくし会は初代理事長が残した「つくす」という理念を胸に、今後も創意工夫を重ね、利用者様の笑顔のために時代を超えてまいりたいと思います。

# 和歌山つくし会沿革

## 創業70年の歩み

(和歌山つくし会 法人設立55周年)

### 創設期 (創業～約15年間)

- |               |   |
|---------------|---|
| 1954年 (昭和29年) | 私設保育所を開設<br>戦後の復興も半ばで、まだ闇市が残っていた時代、1947年(昭和22年)には児童福祉法も制定されたが、現実には大変厳しい社会環境の中で、子どもたちの心と健康を守るため、又生活のため出産後すぐに働かなければならなかった母親たちのために「和歌山つくし会」の創設者谷本千鶴医師が私財を投じて4人の協力者と共に和歌山市内城北地区に開設。 |
| 1957年 (昭和32年) | 和歌山市立乳児院の運営<br>和歌山市からの委託を受け和歌山市片岡町(現広瀬幼保園)の地で、30名の乳児を受け入れて運営開始。   |
| 1966年 (昭和41年) | 「和歌山つくし会」が財団法人として認可を受け、財団法人としてスタート。<br>財団法人「和歌山つくし会」の初代理事長に創設者の谷本千鶴先生が就任。   |
| 1968年 (昭和43年) | 「岩出整肢園」を開設<br>重度障害のある乳幼児のための施設として、岩出町中迫(現つくし医療・福祉センター)に建設、定員50名の施設として運営開始。  |
| 1969年 (昭和44年) | 1969年(昭和44年)社会福祉法人の認可を受け、社会福祉法人「和歌山つくし会」として運営開始。  |

### 発展期 (1970年～約35年間)

- |               |  |
|---------------|--|
| 1970年 (昭和45年) | 「岩出整肢園」に病院の併設が許可され、「重症心身障害児施設」に変更となる。  |
| 1971年 (昭和46年) | 皇太子殿下ご夫妻の「岩出整肢園」への行啓<br>第26回黒潮国体に出席された明仁皇太子殿下と美智子妃殿下(現上皇ご夫妻)が岩出整肢園に行啓される。            |
| 1973年 (昭和48年) | 和歌山乳児院の新築・移転<br>和歌山市片岡町から同森小手穂に移転し、同時に定員を30名から40名に増員して運営開始。<br>「岩出整肢園」を「岩出療育園」に名称変更。 |
| 1975年 (昭和50年) | 「広瀬保育所」の開所<br>子育て中の女性の社会進出の支援等のため和歌山乳児院の建物を改築し、定員60名の「広瀬保育所」を新設。                     |
| 1976年 (昭和51年) | 「つくし保育所」の開所<br>地域からの強い要望を受け和歌山乳児院の2階に定員30名の「つくし保育所」を新設。定員30名の内8名の障害を持つ児童を受け入れる。      |
| 1976年 (昭和51年) | 「桃山療護園」の開園<br>当時、不足していた重症心身障害児のための施設を那賀郡桃山町に新築し、定員50名の施設として開園。                       |
| 1980年 (昭和55年) | 「岩出療育園」の増築<br>年齢を超過した知的障害児施設の受け皿として満床であった岩出療育園に第2病棟を増築し、定員を80名とする。                   |
| 1982年 (昭和57年) | 和歌山つくし会創始者谷本千鶴氏死去  |

## 充実期（2003年～約20年間）

- 2003年（平成15年） 「広瀬保育所」の新築  
周辺の公立保育所を統合し、新しく定員120名の保育所として運営を開始。
- 2003年（平成15年） 「岩出療育園」・「桃山療護園」の両施設において、行政や民間団体からの要請を受け、知的障害児者短期入所事業を開始。
- 2005年（平成17年） 障害児デイサービス施設「ももやま」を開設し、地域支援の充実を図る。
- 2007年（平成19年） 「岩出療育園」全面改築工事の完成
- 2008年（平成20年） 「桃山療護園」を移転統合し、定員130名の施設になる。  
児童発達支援事業・生活介護事業・相談支援事業・訪問看護・介護事業所など事業を拡大し、障害児者の総合的な施設として名称も「和歌山つくし医療・福祉センター」に変更。  
定員136名
- 2010年（平成22年） 「つくし保育所」が、保護者の強い請願を受け幼稚園的機能と保育所的機能を併せ持つ幼保連携型の認定こども園として国内でもいち早く県の認定をいただき、名称も「つくし幼保園」に変更、定員100名で和歌山市吉礼において新築開園。その後、2017年（平成29年）には、定員を135名に増員。
- 2012年（平成24年） 「和歌山乳児院」の新築移転とともに事業所内保育所  
「つくしの里こども園」を併設開園。  
和歌山乳児院を和歌山市森小手穂から岩出市中迫の「和歌山つくし医療・福祉センター」の隣接地に新築・移転し、小規模グループケアを実施。同時に病後児保育室「きらら」を開設し地域における子育て支援の充実を進める。  
「つくしの里こども園」は、当初定員19名で開園、その後2015年に認可型事業所内保育A型の認可施設となる。また、待機児童の解消や女性の社会進出を進めるため2016年に施行された「子ども子育て新支援制度」により、職員の子供たちと地域の子供たちが入所可能な地域型保育所として岩出市の認可（定員30名）を受け、同時に延長保育・一時預かり保育・休日保育事業を開始。  
  
※法人本部の所在地を「和歌山市森小手穂2-1」から「和歌山市吉礼486-1」（つくし幼保園）に変更。
- 2016年（平成28年） 広瀬保育所が「幼保連携型認定こども園」として認可される。「つくし幼保園」に続いて「広瀬保育所」が幼稚園部を設け、幼保連携型認定こども園として、定員135名で運営を開始。茶道や立腰、漢字教育などの特色ある保育・教育を実施。
- 2017年（平成29年） 「和歌山つくし医療・福祉センター」の増築  
増築により会議室、多機能型福祉事業所や医局・各医師のブースなどのスペース等を整備・充実した。また、入所者の重症化が進み、多くの入所者が運動障害と知的障害を併せ持ち呼吸器装着や気管切開、経管栄養投与等を必要とする患者が増え入所者に占める重症患者の割合が増加。重症児者とともに発達障害児の外来診察やリハビリテーション件数が漸増傾向となる。  
  
地域在宅支援事業、デイサービスセンター「つくしの里」の運営開始。地域密着型通所介護事業・介護予防事業・日常生活支援総合事業を定員10名で開設。  
  
一時休止していた訪問看護ステーションを再開、居宅介護支援ステーション「つくしの里」開設。
- 2019年（平成31年） 社会福祉法人「和歌山つくし会」の法人設立50周年を記念し、創設50周年記念式典を「ホテルいとう」で開催。
- 2023年（令和5年） 和歌山乳児院「バンビーニ広場」の整備と「つくしホール」の新築。バンビーニ広場は、和歌山つくし会の利用者や職員の憩いの場として、又つくしホールは、里親支援センター「なでしこ」の事務所や講演会・コンサート等さまざまなイベントに活用できる施設として整備。

## 表彰式

### 感謝状贈呈

#### 平石小児科院長 平石 英三先生

和歌山乳児院、つくし保育所、広瀬保育所の嘱託医として約10年の長きにわたり、子どもたちの治療や健康の維持、健全な育成に多大な貢献をいただきました。

#### 和歌山乳児院ボランティア 植田 廣子さん

和歌山乳児院のボランティアとして、現在も引き続き職員のサポートや子どもたちのお世話に献身的な活動をいただき、子どもたちはもちろん、職員やご家族からも感謝されています。

### 谷本千鶴賞・つくしっ子特別賞贈呈

#### 谷本千鶴賞

#### つくし医療・福祉センター 理学療法士 小山 有佳乃

能登半島地震に際し、和歌山 D-WAT 災害派遣福祉チームの一員として現地で活動し、被災された地域の皆さまの医療・福祉の維持向上に尽力し、また脊髄移植のドナーとして貢献されました。

#### 訪問看護ステーション つくしの里 代表 石原 恵美子

在宅の重症児者や発達障害児の訪問看護に積極的に取り組み、特に育児機能が脆弱となっている家庭を中心に専門性の高い看護力で育児に貢献されました。

#### つくしっ子特別賞

#### 広瀬幼保園 保育教諭 山内 妙子

平成7年からつくし会の保育教諭として勤務し、退職後も臨時職員として引き続き勤務、影日向なく真摯に業務に取り組む姿勢は他の職員の模範であり、職員や保護者からの人望も厚く園の運営に多大な貢献をされました。

### つくし幼保園 保育教諭 中澤 英美子

通算37年正規職員として勤務、園運営全般に目配りし、スムーズな園運営に貢献されました。また、新人職員の育成にも的確な指導を行い、他の職員や保護者から厚い信頼を受けています。

### つくしの里こども園 保育士 北端 智加

保育士として約4年半と勤続年数は短いものの、業務に対する姿勢が積極的で、特に園児や保護者への対応が誠実、かつ寄り添った対応で保護者からの信頼も厚く、園の運営に多大な貢献をされました。

### 和歌山乳児院 心理療法士 小谷 友佳理

乳児院勤続7年目となり、対応が難しい困難事例を担当し、家族対応の窓口として、連日夜遅くまで母親と電話でのやり取りをするなど、誠意に溢れた真摯な姿勢は家族からも信頼され、院の運営に多大な貢献をされました。

### 和歌山乳児院 保育士 鍛冶 幸美

乳児院勤務は8年目となり、業務に対する取り組みや、こどもたちへの対応が真摯かつ誠意に満ちた姿勢で、他の職員ともよく連携・協調し、担当児童や家族から厚い信頼を受けています。また、実習生に対して的確で丁寧な指導を行うなど、実習生や派遣元から、さらには院の評価を高めています。

### つくし医療・福祉センター 生活チーム「つくし学校」代表 島田 夫美

約8年前に発足した職員グループ「つくし学校」の活動を通じてこどもたちの集団保育を実践する中で、医療チームと連携してこどもたちの集団保育を実践し、こどもたちの療育の向上に貢献されました。

### 生活チーム（つくし学校）メンバー

看護師 梶間 真理 ・ 保育士 甲斐 美幸 ・ 看護師 下平 知沙恵  
保育士 中林 紗里奈 ・ 育成主任 島田 夫美 ・ 保育士 海瀬 麻代  
保育士 小坂 優奈 ・ 作業療法士 北条 ひかる ・ 作業療法士 西村 美咲  
言語聴覚士 阪井 友哉

## 表彰式 ギャラリー





## 来賓挨拶



衆議院議員 石田 真敏



和歌山市長 尾花 正啓



岩出市長 中芝 正幸



和歌山市議会議員 丹羽 直子

## 紀州和太鼓集団 「いこら」の演奏



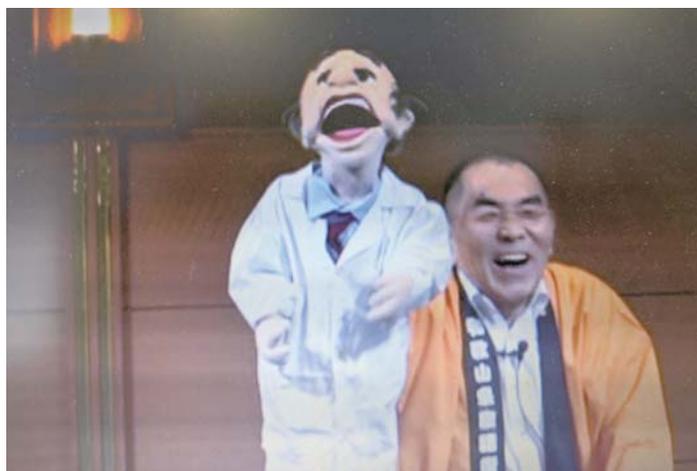
和歌山つくし会職員 峯本 雄貴



和歌山つくし会職員 木村 早織

坂本 理恵

## 腹話術 和歌山県腹話術協会会長 宮本年企氏



腹話術師の宮本年企氏がつくし医療・福祉センター  
月野隆一名誉院長の人形を携え、飛び入り参加しました！

## 第二部 席上揮毫・記念講演

### 席上揮毫 金澤祥子「飛翔」

1985年（昭和60年）生まれの若手女流書家、東京都出身。  
 5歳から書家の母金澤泰子氏に師事し、書を始める。  
 20歳時に銀座書廊で初の個展開催。その後、法隆寺・東大寺・薬師寺・延暦寺・中尊寺・建仁寺・熊野大社・巖島神社・三輪明神大神神社・大宰府天満宮・伊勢神宮・春日大社等で個展や奉納揮毫。福岡県立美術館、愛媛県立美術館等で個展開催。また、ニューヨーク・チェコ・シンガポール・ロシア等海外においても個展開催。  
 2012年のNHK大河ドラマ「平清盛」の題字を揮毫。国体の開会式や天皇陛下の御製を揮毫。紺綬褒章受章。日本福祉大学客員准教授。  
 文部科学省スペシャルサポート大使。東京2020公式アートポスター制作  
 2023年6月ドキュメンタリー映画「共に生きる書家金澤翔子」が全国の映画館で上映

### 記念講演 金澤泰子「ダウン症の娘と共に生きて」

1966年（昭和41年）明治大学卒業  
 1977年（昭和52年）書家・柳田泰雲に師事  
 1990年（平成2年）東京に書道教室開設  
 1998年（平成10年）書家・柳田泰山に師事

書家金澤翔子氏の母。著書に「愛に始まる」（ビジネス社）、  
 「天使の正体」「天使がこの世に降り立てば」（まくら春秋社）  
 「翔子・その書」（大和書房）、「翔子」（角川マガジンス）、「涙の般若心経」（世界文化社）、  
 「心は天につながっている」（PHP）、「金澤翔子」（平凡社）など。  
 現在、久が原書道教室主宰。東京芸術大学評議員。日本福祉大学客員教授。



## 令和6年度 受賞者喜びの声



### 谷本千鶴賞

つくし医療・福祉センター 理学療法士

### 小山 有佳乃

この度、谷本千鶴賞を受賞することができて、とても栄誉あることと感動しています。誠にありがとうございます。

災害支援に興味を持ったきっかけは、東日本大震災後に福島県から転校してきた友人との出会いでした。また、骨髄バンクに登録しようと思ったのは、骨髄移植が必要な患者さんと出会ったことがきっかけです。2019年につくし医療・福祉センターに入職し、初めて一人暮らしを経験した私は、健康な自分でもたくさんの人々に支えられながら生きていることを実感しました。私一人では困っているすべての人を助けることはできませんが、自分の手が届く範囲の人には、何らかの形で協力したいという思いから、登録と参加に至りました。災害支援では被災者の方々から温かい言葉をいただき、骨髄ドナーとしては患者さんからお手紙をいただきました。これらの経験を通じて、改めて人と人は助け合い支え合っていることを体感し、貴重な経験を得ることができました。

今回、この賞を受賞できたのは、理解のある職場に恵まれ、リハビリスタッフをはじめとした皆様に協力していただけたおかげであると痛感しております。皆様へ心より感謝申し上げます。

今後も、自分なりにつくし会や社会に貢献できるように精進してまいりますので、どうぞよろしくお願いたします。



### 谷本千鶴賞

つくし医療福祉センター訪問看護ステーション「つくしの里」代表

### 石原 恵美子

今回谷本千鶴賞を受賞し、スタッフ一同訪問看護の頑張りが認められたという気持ちでうれしく思っています。誠にありがとうございます。

平成24年の訪問看護の立ち上げから12年ほどの間、様々な発達段階のこどもからお年寄りまで、看護を必要としている方がその人らしく笑顔で生活できるようにサポートし、サービスを提供出来るように頑張ってきました。

0歳児の新生児（NICUからの退院後など）から学童期までのこどもたちが多くなり、発達や成長を親御さんと共に見守りながらサポートしていくことが増えています。訪問看護は本人以外の家族（キーパーソンは母）を含めての看護の実践であり、思い通りにならないケースも少なくありません。ケース会議やスタッフ間の話し合いを頻回に行い、その人を取り巻く多職種で連携し、日々のその人らしい生活を送れるように、本人や家族が孤立することがないように支えたいと努力しています。

一人の力だけではどうしてもできないケースも多いのですが、チームで話し合い協力し、計画→実施→評価を繰り返し、改善していくよう努力しています。

スタッフは正規職員以外の登録職員が多く情報の共有などなかなか困難ですが、協力し合い皆が同じ質の高いケアになるように頑張っています。

私は以前在宅での病児の見取りを経験したことがあります。母の愛情や多くの学びがありました。今後スタッフの一層の充実等が可能となれば、ターミナルケアなども行っていきたいと思っています。



## つくしっ子特別賞

広瀬幼保園 保育教諭

山内 妙子

この度、つくし会創業70周年の記念すべき年に、光栄にも「つくしっ子特別賞」をいただき誠に有難うございます。これも偏に園長先生をはじめ皆様から温かいご指導とご協力をいただいたお陰と心から感謝申し上げます。

私は定年退職後も非常勤の保育士として再雇用して頂き、生きがいがあります子どもたちと関わる仕事を今も続けることが出来ています。

これからも園の先生方と一緒に楽しく、子どもたちの為に精一杯努力をしていきたいと考えていますので、今後ともよろしく願いいたします。



## つくしっ子特別賞

つくし幼保園 保育教諭

中澤 恵美子

この度は「つくしっ子特別賞」を受賞させていただき、誠にありがとうございます。

私は短期大学卒業後、つくし幼保園（元つくし保育所）の正規職員として採用され、臨時職員も含め勤務期間が40余年となります。このように永年勤めてこられたのは、園長先生はじめ、周囲の職員の皆様方のお力添えがあったこと、そして子どもたちの笑顔に支えられたからだ痛感し、いつも感謝しております。

保育界も時代の流れとともに、保育教育の理論はずいぶん変化したように感じますが、根底は変わっておらず、私はこれからも子どもたちと共感できる感性と「つくす」理念を忘れず、お役に立てる間は、頑張ってお勤めさせていただきたいと思っています。

どうか今後ともよろしく願い申し上げます。



## つくしっ子特別賞

つくしの里こども園 保育士

北 端 智 加

この度、「つくしっ子特別賞」をいただきましたこと、身にあまる光栄と存じます。

これもひとえに、上司、同僚の皆様のお陰と心より感謝申し上げます。

つくしの里こども園に入職し、和歌山つくし会の「つくす」という素晴らしい精神に感銘を受け、その考えは私自身の仕事や生活をしていく上での指針となりました。保育経験が浅い私にとって、こども園ではたくさんの方のことを学ばせていただきました。保育は正解が一つではないので悩むこともありますが、一人ひとりに合わせたアプローチを丁寧に試しながら信頼関係を深めていくことの大切さを、日々の経験を通して学ばせていただき、こどもと心が通じ合った時には、嬉しさと同時にやりがいを感じることができています。

こども園で出会うこどもたちは、守られていた家庭から初めの一步を踏み出したばかりの小さいこどもたちです。そのこどもたちの『生涯の幸せを育てる』ための土台となる大切な時期に関わる一人として、こどもたちがそのままの自分を愛し、人を信じることができるようになるために、こどもたちの心に寄り添い安心できる存在となれるよう、これからも精進して参ります。



## つくしっ子特別賞

和歌山乳児院 臨床心理士

古 谷 有 佳 理

この度は、「つくしっ子特別賞」を受賞させていただき、誠にありがとうございます。

乳児院に入職して、今年で6年になります。6年間、困ったことも迷うこともありましたが、先輩方や同僚に支えていただき、続けることができました。感謝申し上げます。

乳児院では、発達に課題のあるこどもや、トラウマを受けたこどもが生活をしています。

1年目の時は、こどもとどう関わったらいいのか悩み、保護者の方との信頼関係を築くことも難しかったのを覚えています。今では、乳児院に望んできたこどもはいないし、どんな保護者の方も決して望んで分離を選択した方はいないと思うようになりました。そんなこどもたち、保護者の方が少しでも、乳児院に来てよかったと思っていただけるように、これからは職員間で話し合いながら、それぞれに必要なケアを考えていきたいです。

今後も、心理士として一人ひとりの気持ちに寄り添っていくことができるよう、一層努力をしていきたいと思っております。変わらぬご指導、ご鞭撻のほど、どうぞよろしく願いいたします。



## つくしっ子特別賞

和歌山乳児院 保育士

鍛冶 幸美

和歌山つくし会創業70周年というおめでたい年にこのような賞をいただきまして、ありがとうございます。乳児院ではこどもとの距離が近く、関係も深くなり、毎日楽しく笑顔とパワーをたくさんもらっています。

しかし、一人ひとりにあった関わり方を模索し悩んだり、様々な家庭環境の中で育ったこどもたちの背景を考えるとつらいことも多いです。

その時に一緒に悩み考えてくれる先輩方や仲間にはいつも支えてもらっています。

一人では小さな力も同じ方向を向いてこどもたちの幸せを常に考え、共にかかわる仲間がいることが大きな力になっています。

大切な人たちに助けられ、毎日楽しく頑張れるからこそいただいた賞だと思います。

そのことに感謝し、これからも皆で支え合いながらこどもたちの笑顔のために頑張りたいと思います。

この度は本当に有難うございました。



## つくしっ子特別賞

つくし医療・福祉センター つくし学校チーム代表 育成主任

島田 夫美

「つくしっこ特別賞」をいただき有難うございます。当施設は重症心身障害者・児施設で136名が入所しています。児童の入所が少しずつ増えていく中で、どのようにすれば施設生活で個の発達を促せるのか、“一人ひとりの持っている力を引き出したい”を目的につくし学校チームが発足しました。チームの構成員は保育士・看護師・リハビリ（PT・OT・ST）の多職種協働です。つくし学校チームは2016年より18歳以下の重症児を対象に保育活動を週1回1時間行っています。

保育内容については保育士が会議で決定し、保育の進行は保育士が担い、児童1人に対して1名のリハビリスタッフが付き活動します。

看護師は吸引が必要な時に実施してもらいますが、保育活動も一緒に入ってもらっています。

児童の発達には個人差があり、一人ひとりの目標を設定し、保育中は一人ひとりの児童に視線を合わせ、個の感情が表出するまで、五感を刺激しながらじっくりと時間と愛情をかけています。

つくし学校チームの活動が継続する中で、児が発声したり、能動的に動いたりなどの反応が見れることや、精神的に大人になってきている姿を見られることがあります。

個の持っている力を信じ継続して働きかけることの重要さを感じ、私達があたりまえにできていることは決して“あたりまえ”ではなく、そのことに感謝することだとも教えてくれます。

今後もこどもたちが安心して過ごせる場としてつくし学校を継続していきたいと思っています。



## 令和6年度 全国社会福祉協議会会長表彰

つくし医療・福祉センター 育成主任

若井 洋子

この度は、令和6年度全国社会福祉協議会会長表彰という栄えある賞をいただき、誠にありがとうございました。これもひとえに職員の方々、多くの皆様のご指導と温かいご支援の賜物と深く感謝しております。

平成9年7月に岩出療育園に入職し27年。今でも入職した時のことが鮮明に蘇ります。多くのことを学び、多くの出会いがありました。

思い返せばあっという間で月日が経つことの早さには驚いています。

保育士、サービス管理責任者として重症心身障害児・者の施設に携わり、現在まで多くの先輩、上司や同僚の皆さま、そして利用者様の笑顔に支えられ、今日まで務めることができました。

今後も皆様方にはご指導とご鞭撻をお願い申し上げ、感謝と御礼の言葉とさせていただきます。



## 令和6年度 和歌山県社会福祉協議会会長表彰

つくし医療・福祉センター 介護福祉士

池本 久男

この度、和歌山県社会福祉施設職員功労者表彰をいただくことができ、誠に光栄に思います。これもひとえにご指導、ご支援いただきました皆様のお陰であると心より感謝申し上げます。

桃山療護園に入職して8年、平成20年に岩出療育園と桃山療護園が統合してつくし医療・福祉センターになり、17年間私は常に利用者様の立場を考え、あかるく・あたたかく・あんしんして過ごせるように努めてまいりました。

令和7年3月に定年退職をむかえます。長い間本当に有難うございました。

今後ともつくし医療・福祉センターのさらなるご発展を祈念しております。

長い間本当に有難うございました。

# つくしっ子インタビュー！！



## 瑞宝単光章を受章して

広瀬幼保園 副園長

前田典子

1. 前田先生、この度は栄えある瑞宝単光章を受章されまして、誠におめでとうございます。まずご感想など聞かせてください。

ありがとうございます。

ただただ驚きました。でもたいへん有難いことだと思っています。推薦してくださった方にも感謝の気持ちでいっぱいです。
2. 現在は広瀬幼保園の副園長として、そしてこれまではつくし幼保園の副園長として長年お勤めいただいたと思いますが、長年の保育教諭生活の中でどんなことが一番印象に残っておりますか？

たくさんあるのですが、卒園される保護者の方から「前田先生の言葉で今まで頑張れた」と言ってもらったことです。そのお母さんは下のお子さんの育休中、仕事復帰を控え、家庭との両立で不安が大きくなっている状態でした。その時に「保育園は働くお母さんの見方だからね」と声をかけたのです。「それがずっと励みになって、頑張ってきて来られた。保護者代表謝辞にもこの思いを入れたんです」と。嬉しかったですね。
3. こどもさんたちや家族さんとのかかわりの中で一番大切なことは何ですか？

学生時代のアルバイトで「目配り、気配り、心配り」という言葉を教わりました。「心をもって」かかわることを大切にしています。
4. 仕事上どんなことを心掛けておられますか？

「目配り、気配り、心配り」と「迷ったら原点に返れ」です。あと、「笑顔で楽しく」ですね。
5. この仕事をはじめられたきっかけは何ですか？

母親の「女性が一人で生きていくために、手に職をつけなさい」の言葉と、幼稚園の時の担任の先生が大好きだったので、その先生への憧れです。小学校の卒業文集にも「将来の夢は幼稚園の先生」と書いています。



## 6. 今後の仕事上の目標は何ですか？

目標という大きな志はありませんが、原点にあるのは「こどもたちの笑顔」ですので笑顔が溢れるように、ご家族や職員のサポートをしていきたいと思います。

## 7. 余暇はどのように過ごしておられますか？

以前ジャーナルにも書かせていただきましたが、「宝塚！！」です。  
(つくしジャーナル第5号「私の心躍る！その時」参照)

## 8. 内示をいただいてから皇居での伝達式までの流れを教えてくださいませんか？

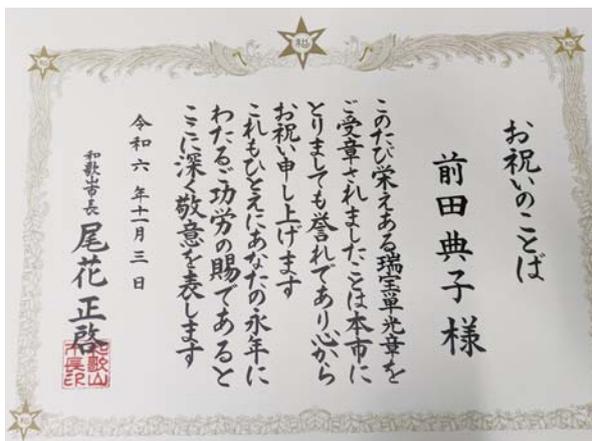
まず、9月中頃に和歌山市長自ら私個人の携帯に連絡が入りまして、“市長から電話とは何事！？”と動揺しました。「おめでとうございます。秋の・・・(心臓バクバクで聞き取れない)で、社会福祉の功労です」といわれたときはとっさに「ありがとうございます」と答えたのを覚えています。電話を切ってから“社会福祉の功労？秋の・・・叙勲！？まさか～”とただひたすら動揺していました。その数日後、和歌山市保育こども園課の担当者から電話が入り、「まず県庁で伝達式があって、そのあと皇居で天皇陛下に拝謁という流れですが、どちらも行きますか？返事は今ください。」「行きます！！」と即決でした。ところが、今年は選挙があり、県庁での伝達式が11月6日から12月に延期されました。拝謁は11月14日でしたので、先に勲章を戴き、子ども家庭庁での伝達式と天皇陛下の拝謁に臨みました。その後12月6日の県庁での伝達式にて勲記を戴き、和歌山市長を表敬訪問し、ようやく落ち着いたところです。

## 9. 今回、最年少でのご受章だと伺っておりますが、、

秋の叙勲では最年少みたいですね。でも最年少だからこそ“まだまだやれるだろう”“頑張れ！”と鼓舞されているような気がします。これからも“私にできることは何だろう？”と模索していきたいと思います。



ありがとうございました。これからも後輩の先生たちがどんどん前田先生の後に続いていくことと思います。明朗快活、そして思いやりのある寄り添う保育に定評のある前田先生、今後ともよろしくお願ひいたします。



## 伊都地方在宅障害児支援ネット「かっちゃんの会」



### — 伊都地方の障害児多職種連携支援の嚆矢（こうし） —

地域在宅支援センター センター長

**飯塚 忠史**

#### 1. 「かっちゃんの会」を紹介するきっかけ

ある日、谷本理事長からつくしジャーナルへ「かっちゃんの会」（以下「会」とします）について書いてはどうかとお勧めがありました。「会」が活動していたのは20年以上も前のことであり、資料も数年前に廃棄してしまったため、私は書くことが出来るのか迷いました。当時は現在のように法令もよく整備されておらず、困難な状況での社会福祉活動でありました。理事長のお勧めの意図は、そのような伊都地方の障害児支援運動の記憶が忘れ去られるのはとても残念だということでした。「会」は私一人ではなく関係者のお力で10年間も続いたのであり、記録に残すのは私の責務であるとの思いから、十分ではありませんが紹介する気持ちになりました。

#### 2. かっちゃんの紹介と支援連携会議の結成

当時（1998年秋頃）私はかつらぎ町にある県立医大紀北分院の小児科で働いていました。かっちゃんは伊都地方に住んでいた小学校低学年男児で、「寝たきり」の重症心身障害児でした。自発呼吸があり、気管切開や人工呼吸は行っていませんでしたが、生活動作はすべて全介助で、すべての生活をお母さんに頼っていました。

ある時お母さんに重い病気が見つかり、かっちゃんのケアのみでなく、家族の生活も維持できなくなりました。そこで関係者が集まって、知恵を出し合ってこの難局に対応することになりました。集まったのは、養護学校教諭、行政職員、保健師、分院の看護師、主治医の私、等々でした。ご家族の生活を支え、かっちゃんのケアを誰にお願いするか、皆で必死に考えました。行政の方がかっちゃんの入所先として、当時の岩出療育園（現在のつくし医療・福祉センター）や国立療養所和歌山病院（以後和歌山病院）等にも問合せましたが、見つかりませんでした。結局、集まったメンバーで連携して支援し、かっちゃんのケアは年老いたお祖母さんにしばらくお願いしました。関係者はその後何回か情報交換や対応のため集まって話し合いました。数か月後いよいよお母さんの様態が悪くなったときは紀北分院に2人一緒に入院しました。空いていた6人部屋を使い、お母さんとかっちゃんが並ぶように寝ていました。それから程なくお母さんが亡くなりました。お母さんがかっちゃんを横にして、一体どんな気持ちで最期の時を迎えたか、残念ながら私には聞く勇気はありませんでした。後日退院したかっちゃんが和歌山病院へ入所したとの報告を聞きました。参加メンバーはお母さんが亡くなったことで気落ちしましたが、それなりに役に立ったという気持ちは共有していたようです。



### 3. 「かっちゃんの会」の発足と活動

私の記憶によれば、お母さんが亡くなり、かっちゃんが和歌山病院へ入所後のある時、どなたかから「連携会議はこのまま終わってしまうのか」と聞かれました。自然発生的にできたものですが、在宅障害児の問題に対応するのに有効でしたし、皆さんの熱意も残っていたので、続けることが決まり、名前は「かっちゃんの会」となりました。在宅の重症心身障害児の問題を多職種（医師・看護師・保健師・行政職員・教師・福祉施設職員、保護者等）が連携し、対応するという発想は当時和歌山ではまだ珍しかったのではなかったかと思います。

しかし症例検討のようなことを始めた頃に、社会的に個人情報保護が問題になりました。

2003年5月には個人情報保護法が成立しています。他人であるボランティア・メンバーが家族の内部情報を議論することには問題があることがわかりました。そこで「会」の目的を変更し、伊都地方の障害児のケアを充実するには、何が必要か、どうしたらよいかを考える研究会としました。実際には年に1～2回の座学と施設見学を行いました。参加者は最盛期で10人以上いました。当時はちょうど社会福祉事業法の見直しが始まったところで、2000年6月には社会福祉基礎構造改革、2003年4月には支援費制度への移行、2006年4月には障害者自立支援法が制定されています。座学の講師是那賀地域の福祉施設の職員にお願いし、彼はその後も勉強会の講師や「会」の運営の支援をしてくれました。その頃参加してくれたのが、つくしでリハビリ課を立ち上げたばかりの川野リハビリテーション課 課長でした。熱心な若者がいるんだと思ったことが、今も記憶に残っています。

他地域の施設見学に車を連れて行きました。そのうちの1つは兵庫県の障害児者入所施設で、多分今の西宮すなご医療福祉センターではないかと思います。大きな施設で、訪問時がちょうど利用者の移動時刻で、日中活動で外出する人たちの出入りが多かったことを覚えています。こんな大きな施設が和歌山にもあったら色々なサービスができるだろうと羨ましく思いました。

また泉南地域にあった保護者が立ち上げたデイは、倉庫の1部屋を間借りしただけの窓もない本当に小さなものでしたが、こどもの居場所を作ろうとする保護者の熱意が伝わり、伊都地域でもこんな風に立ち上げないといけないのかと考えたものでした。

当時の和歌山つくし会の重症心身障害児施設岩出療育園や桃山療護園も見学させていただきました。両園が新築統合する前のことで、岩出療育園本館は歩くと床がきしむ建物で、入り口の前にはプレハブの倉庫のようなものがあり、そこで重症心身障害児（者）通園事業が実施されていました。丁度利用者の検診のため看護師が採血をしようとしていたのですが、その児が紀北分院の利用児で、その時採血を手伝ったのが私であり、つくしで行った最初の仕事でした。桃山療護園にも見学に行きました。講堂で説明を聞いたのですが、お話をしてくれたのが若か

りし頃の林参与で、黒服をぴっちり到着こなし、これから東京に出張に行くという姿はまるでエリートビジネスマンのようでした。

その頃私は地域のきのかわ養護学校（現支援学校）の「特殊教育における福祉・医療との連携に関する調査研究運営協議会（1998年）」やその後の「障害児早期教育相談等研究協議会（1999年）」、「地域特別支援教育等研究協議会（2004年～）」等に参加させていただき、地域の障害児支援者の方々と知り合う機会がありました。熱心な支援者とお会いでき、伊都地域の障害福祉・教育のあり方を考えて来ました。

「会」はその後徐々に参加者が減り、活動も回数が減ってきました。当事者も支援学校を卒業し、中心となったメンバーが減り、支援学校の先生や行政の担当者も異動となりました。勉強会や施設見学を繰り返しても、一向に伊都地域の状況が変わらないのに失望した人もいたのかもしれませんが、一塊の集団として活動していましたが、新しい参加者がなく、活力が衰えてきました。2008年4月から私は紀北分院長に就任し、分院建て替えに奔走するようになり、地域在宅の障害児支援に取り組んでいませんでした。ついに2010年8月に「会」を解散することを決め、参加者にお知らせのお手紙を書きました。

#### 4. 最後に

2010年10月分院が新築開院した後、2012年10月に私は分院を退職し、和歌山つくし医療・福祉センターに副院長として赴任しました。岩出療育園と桃山療護園は合併してとてもきれいな建物となっていました。つくしへ入職したきっかけは前院長の月野隆一先生からの「在宅部門を立ち上げるから来ないか」というお誘いで、つくしの様な大きな施設ならば、在宅障害児者にもっと何かできるのではないかと期待して来ました。その後「会」の参加者の中には、障害のあるお子さんが亡くなった後に障害児支援の仕事に就いて支援を続けた保護者さんや、支援学校教諭から大学の先生に転身した方もおられました。それぞれ「会」での活動経験が人生選択のきっかけになったのであれば、素晴らしいなと思っています。



## 「令和6年度 和歌山つくし会 永年勤続表彰」

### 和歌山乳児院

5名

勤続5年 大串春奈  
 勤続10年 戎脇沙矢  
 勤続15年 中田里美  
 勤続20年 土山佳子  
 勤続30年 岡 淳子

### 広瀬幼保園

5名

勤続15年 岡本直子  
 貴志敦子  
 盛下今日子  
 勤続20年 卯野しのぶ  
 勤続40年 柴田里佳

### つくし幼保園

4名

勤続5年 片岡美幸  
 勤続10年 尾上 恵  
 土橋仁美  
 勤続15年 谷本奈美子

### つくしの里こども園

3名

勤続5年 口井千賀  
 勤続10年 橋本有加  
 勤続20年 大江静香

### 里親支援センター なでしこ 1名

勤続10年 竹之下 もえこ

### つくし医療・福祉センター 29名

勤続5年	濱口恵子	細野美美江	筒井喜子
	坂本由美子	中西麻友	小山有佳乃
	阪井友哉		
勤続10年	榮 梓	土井 妙	並松都紀子
	岡田知恵子	田中恭子	河野綾子
	廣原悠生	楠石多佳子	
勤続15年	木村雅紀	梅田尚見	西野裕美
勤続20年	柴田喜則	壺井美希	櫻井誠二
勤続25年	貴志浩之	濱田拓也	木村史朗
	渡邊孝章		
勤続30年	坂本理恵	松田守司	
勤続40年	大西好子	山下敬子	

## つくしっ子連載



連載 第2回 里親支援センター「なでしこ」

## 第2種社会福祉事業 里親支援センターへの道のり

社会福祉法人 和歌山つくし会 常務理事

森 下 宣 明

令和6年4月1日、里親支援センターが第2種社会福祉事業に位置付けられ、「なでしこ」も認可されました。これも谷本理事長をはじめ、皆様のご支援のお蔭であり、心から感謝申し上げます。今後は、なお一層、社会的擁護の必要な子どもたちのため、里親支援に尽力していきたいと思えます。

認可から早9ヵ月、未だ手探りの状態での運営が続いています。わかっていたことですが、新しい事業を立ち上げる際には、先の見通しをたて、十分な準備期間を経て、着実に成果が出るよう、慎重に行わなければなりません。

今回の立ち上げで、当初予定していたこととの差異が発生したのは、職員体制と業務内容についてでした。まず、職員体制については、当初確認していた職員の資格について、県に認めていただくことが出来なかったことにより収入減になりました。また、初めて里親支援業務を行う職員が多く、その育成についても課題が残ったままです。

業務内容については、「里親支援センター及びその業務に関するガイドライン」に従って「子ども支援課」及び「中央児童相談所」と協議を重ねながら実施していますが、支援に待たはありません、里親さんや子どもたちにとって、なでしこが頼れるところになれているか、気軽に立ち寄れるところになっているか、関係機関に信頼されているか、毎日の業務に追われて、見逃していることは無いか等々、反省の日々が続いています。

その上、今年はやけに里親委託の不調が続いています。その原因を調べて、少しでも不調を減らし、子どもたちが里親家庭で幸せに暮らせるように、職員の力を結集し、支援に励みたいと思えます。



## 連載 第7回

## 「イタリアで見つけた共生社会のヒント」

つくし医療・福祉センター リハビリテーション課 課長

川野 琢也

「地域コアリーダープログラム」の事業活動には派遣先でホームステイをするプログラムが組み込まれています。3分野（高齢者・障害者・青少年）で活躍する現地の当事者のお宅に2～3名ずつに分かれて一晩を過ごし訪問先で交流や情報交換をするというプログラムです。しかし今回のイタリア派遣は内閣府としても初めての訪問先で、ホームステイができるほどのコネクションがなかったようで、ホームビジットをさせていただくに留まりました。私はイタリア語はおろか英語もろくに喋れないので、団員のみんなと通訳の栗原さんと一緒にお宅訪問するホームビジットになって一安心したことを今でも覚えています。というわけで、今回はホームビジットで2件のお宅に伺ったことを記したいと思います。

まず1件目に訪問したのはローマ市内で過ごされているアンジェルマン症候群（31歳）のLetiziaさんの家庭でした（写真1・写真2）。2階建て集合住宅の2階部分で母親と二人で暮らしていました。母親は全国障害者家族協会（CONFAD）の会員で、障害のある家族（特に介護者）の人権について活動をし、さらにファミリーケアギバー（家族介護者）協会の名誉会長でもありました。Letiziaさんの母親は介護のために仕事を辞め、24時間365日休みなく介護をしている生活でした。このような生活ですが、給料はどこからももらえないし休暇もなく一般の労働者には認められている権利が家族介護者には認められていないと仰っていました。さらに自分が病気になった時には病院にも行けず自身の治療もできない状態で、健康に生きる権利がなく自らの人生を犠牲にしていると訴えておられました。イタリアの（重度）障害者は在宅で生活するのは容易ではなく、入所施設などで生活するほうが容易であるがそれは家族の想いとしては矛盾していることだと話されました。CONFADは家族介護者の社会保障の保護、経済的支援、健康の保障、休息や休暇の権利、労働と再雇用の保証などについてイタリア政府に要望しています。これに関しては日本の家族介護者についても同様のことがいえるかと思います。最近では周産期医療の発展に伴って「医療的ケア児」が増えてきており、人工呼吸器管理や喀痰吸引など24時間介護が必要な方が在宅でも生活し、家族は疲弊している現状があります。また強度行動障害児者の家族介護についても同様の課題があります。訪問看護、訪問介護サービスなど地域を支える事業所は増えてきていますが、レスパイトができるショートステイ事業所はまだ不足しており社会資源全体でみると日本もまだまだ在宅の障害児者支援については充分ではなく、家族に対する支援も充分ではない状況です。

2件目に訪問したのはローマ市内で過ごされているダウン症候群（45歳）のSerenaさんの家庭でした。5階建ての集合住宅の3階部分で母親と二人で暮らしていました。私たちが訪れた際にSerenaさんは不在でしたが、しばらくすると帰宅してきました。カフェでカプチーノ飲んでいたり、ショッピングを楽しんでいたことを教えてくれました。とてもおしゃべり好きで、

新体操でスペシャルオリンピックスに何度も出場してメダルを何個も獲得していることや、インクルーシブ教育についての話を伺うことができました（写真4）。彼女にとってインクルーシブ教育は「全てにおいてみんなと同じ経験をすることができて楽しかった」と話されていました。ただ一方で「障害の程度や内容によっては、困っている人もいる」とも仰っていました。また母親も「親は障害のある子どもを持つと保守的になってしまいがちであるが、共に学ぶことで自立することに目を向けることができた。他の子どもとの接点があることは良い。当時の家族の不安を解消してくれた。」と話されていました。Serenaさんは働いておらず、ボランティア活動と新体操の練習を週に2日しており、それ以外は自由に過ごされていました。自己決定とそれを尊重し見守る母親という関係での暮らしを楽しんでいました。

2件のホームビジットでしたが、障害像も違う上に生活スタイルも異なっており、ある意味で対照的な2家族でした。このプログラムを通して、当事者家族の想いを聞くことの重要性を改めて確認することができました。価値観の違いを理解したり多様性を尊重するためには、まずは当事者の話しに耳を傾け、生の声を聴いて想いを共有することが共生社会の第一歩ではないかと考えさせられました。



Letiziaさん家族と私たち



Letiziaさんと筆者



Serenaさん



Serenaさんと私たち

## つくしっ子レポート！ 研修特集

### 「みんなでおとまり、たのしかったよ！」

和歌山乳児院 看護師

口 井 真理子

みんな「まだかなーまだかな」と待ちに待ったお泊り保育。朝からお出かけ着に着替え気分もそわそわ。自分のリュックを背負って、ワクワクしながら笑顔で手を振って出発。

まずは「さぎのせ公園」へ。初めて見る大きな遊具にどんどん挑戦し、じんわり汗をかくほど楽しく目一杯身体を動かし遊びました。お腹が空く頃に和歌山イオンへ。「なに食べようかなー」「どれもおいしそうだね」と話ながら美味しそうなディスプレイを覗き込み、みんなの大好きなハンバーグのあるお店へ。顔ほどの大きなハンバーグを口いっぱい頬張って美味しい昼食を楽しみました。

車越しに初めての海を見ながら、大きな夕日が海に反射する頃に加太の宿泊施設に到着。

「海だよー。大きいね。おひさまオレンジ色できれいだね」と話すとキラキラした笑顔で夕日を見ていました。夕食はバイキング。そして、テーブルにはあれ！また大きなハンバーグが。でもすぐにぺろりと完食しました。いつもと違うお部屋に少し興奮気味でしたが、初めて大きなお風呂にも入り、大人もこどももみんなで並んで川の字になって寝ました。

乳児院ではできない初めてがいっぱいの貴重な体験をすることができた楽しいお泊り保育でした。





## 「須磨シーワールド」

(令和6年11月23日)

つくしの里こども園 園長

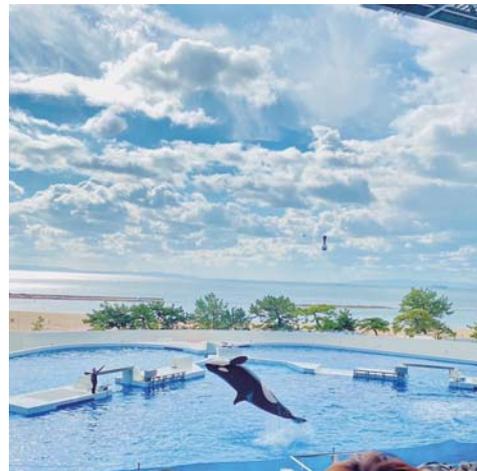
石倉 芳美

5年ぶりの研修旅行の再開、私にとりましては和歌山つくし会に入職し8か月目の初めての親睦会でしたが、当日は天候にも恵まれ全職員参加で楽しい一日をすごすことが出来ました。

須磨シーワールドではシャチやイルカのショー、海や山の生物を身近に感じ、ランチは隣接するシーワールドホテルで海を見ながらのビュッフェでたくさんの食材に触れることが出来ました。

この経験を日々の保育に活かし、こどもたちに自然や命の大切さを伝え、人と生き物の共存社会に興味を持てるよう、又食事の楽しさを通して食育につなげることが出来れば、と思います。

職員たちのリフレッシュ、又交流を深めることで新しい発見もあり、視野を広くして日々の業務に取り組んでいきたいと思っています。



## 令和6年度職員研修でディズニー・オン・アイスへ！

(令和6年8月11日)

広瀬幼保園では、令和6年度職員研修としてディズニー・オン・アイスの鑑賞を行いました。まず、会場に入ったときからディズニーの素晴らしい世界観が感じられ、ワクワク感がいっぱいになりました。ミッキーとミニーを筆頭に次々と人気のあるキャラクターが登場し、音楽とダンス、スケートの要素を織り交ぜストーリーを展開していくミュージカルショーで、その世界を十分に堪能しました。表現と伝えることの大切さを再確認することができました。会場に来ているこどもたちのキラキラとした幸せあふれる笑顔に触れ、園でもこどもたちにこんな笑顔を与え続けるられることがどれだけ大切か強く感じました。



## 研修「大仙公園とチョコレートミュージアム、 須磨シーワールド」 (令和6年11月30日)

つくし幼保園 副園長

荒川 知子

今回の研修では、大仙公園とチョコレートミュージアム、須磨シーワールドを訪れ、大仙公園の日本庭園では紅葉が見頃で、晴天の青空に赤、橙、黄、緑の色のコントラストがとても美しく、池の水面にその景色が映り込み、まるで絵画を見ているようで感動しました。チョコレートミュージアムでは世界中のチョコレートのパッケージなどが多数展示されていて、可愛いものから芸術的なものなど、色やデザインがどれも素敵で思わず手に取ってみたいくなるように工夫されているように思いました。

須磨シーワールドではイルカやオルカのショーを見たり、水が生まれ集まり川となってやがて海へとつながっていくように水族館をまわるようになっていたのでそれぞれの場所に生きる魚や水辺の生き物たちを観てまわったりし、その美しさや不思議さ、たくましさなどそれぞれの生き物たちの魅力を感じ取ることが出来ました。

今回は公園、ミュージアム、シーワールドとそれぞれの場所で自然や芸術、生命などの様々な美に触れることが出来、心にたくさんの栄養を取り入れることが出来たように思います。

保育者として様々なものを観たり、触れたりしたときに素直に感動できる豊かな心やこども心を持ち続けられるように、そしてこどもたちが五感で感じられるような体験ができる環境を整え、心豊かに成長していけるような保育の充実に向け、今後も務めさせていただきたいと思います。



## 「移動ミニ博物館が来たよ！」



(令和6年11月7日)

多機能型福祉事業所「つくしの里」 所長

濱田 拓也

多機能型福祉事業所では、2024年は利用者も職員も楽しもう！ということで、まず同法人内の保育所との交流を図ることから始めました。和歌山つくし会の事業所内保育所「つくしの里こども園」の石倉園長にお願いしたところ、快く引き受けてくださり、毎月2回+α交流を続けているところです。

ほぼ毎月色々なイベントを計画、実施していますが、11月は県立自然博物館が実施している「出張！移動ミニ博物館」をお願いしました。

当日朝9時過ぎには博物館職員が来てくださり、生活介護ルームいっぱいには様々な海の生物が入った水槽やタライが置かれ、キジやメジロイタチやキツネなどの剥製、サメの歯の骨格標本など部屋いっぱいに並べられ、わくわく感満載！10時前にはこども園から全園児が「おはようございま〜す」の元気な挨拶と共に到着、多機能型福祉事業所「つくしの里」の利用者、職員合わせて大盛況となりました。自然博物館には遠足やプライベートで何度か行ったことはありますが、剥製を手にとって触らせてもらったり、カニや貝類、その他色々な生き物を身近に体験するのは初めてで、こども園のこどもたち、つくしの里の利用者、何より職員が大興奮で楽しい時間を過ごすことが出来ました。

つくしの里の利用児・者たちも自分の顔が入るくらい大きなサメの骨格を持った時の驚いた表情！今も忘れられません。いい思い出になってくれていると良いな！

何もかもが初体験でこのような機会を設けてくださった自然博物館の皆様に感謝です。

これからもみんなの笑顔を求めて楽しい取り組みをどんどん取り入れていきたいと思います。



もふもふ

## つくしっ子ニュース！！

## 寂しがり屋の「ミーコ」からの手紙

私は、5年前保育教諭さんの車のボンネットの中に隠れていた「ミーコ」で～す。

(つくしジャーナル第1号、第2号に掲載されました！)

今は、面倒を見てもらっているお家の縁側（和室と庭の間のローカ）に3階建てと続間付きのゲージを用意してもらって、その中で元気に過ごしています。あれから少し太ったかな？

ご主人さま（つくし幼稚園の岡園長先生）は日中留守なので、一人でゲージの中から庭などの景色を眺めたりローカに出て玩具で遊んだりしています。楽しく遊んでいる最中に何か音がすると、怖くてすぐにゲージ内のお家に潜って、「ご主人さま、早く帰ってきて～!?」と待っている私です。

ご主人さまが帰ってきた気配がすると「早く来て!! ニャー!」と叫びます。するとすぐに「寂しかったのネ」と、“なでなで”や“ブラッシング”をしたり、“抱っこ”をしたりしてくれます。

もっと一杯してほしいときは、スリスリやご主人さまにしがみつくようにします。すると、「もっとやってほしいの?」と繰り返しやってくれます。

私は、「いつもご主人さまが傍に居てくれるといいのにニャー!?」と思っている寂しがり屋です。「皆さん、いつでも遊びに来て!!。待ってるからニャ～!?。」

ミーコより



## 編集後記 「明るく温かく安心な」



つくし医療・福祉センター1F光のホールに和歌山つくし会創業70周年を記念し、金澤翔子さんが揮毫して下さった額が掲げられました。

「明るく温かく安心な」という和歌山つくし会の各施設の理念であるこの言葉は、岩出療育園 井上隆司園長の時代から代々の職員の皆さんにその精神が伝えられてきました。

これからもこの精神を忘れることのないように、私たちも日々の業務の中で反芻し、活かしていきたいと思ひます。

つくしジャーナル自称編集長 谷本